
魔法少女まどか マギカブレイヴ

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカブレイヴ

【Nコード】

N6818W

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

地球リセットを救うため、砲台の引き金となった馬神ダン。だが彼は死んでいなかった。マギサの導きで一人の少女の願いを叶えるためにダンの新たな戦いは始まるうとしていた。

バトルスピリッツブレイヴとまどか マギカのクロスです。

第1話ダンの新たな戦い（前書き）

バトスピとまどか マギカのクロスです。バトスピは最終回後の話となりますね。

第1話ダンの新たな戦い

『……きて、起きて……ン』

（懐かしい声。この声は……）

『ダン、起きて……貴方はまだ死んではいけない』

（マギサ？俺はグランロロにいるのか？）

『いいえ、貴方がいる場所は貴方がいた地球とは別の場所、まだ目覚めていない貴方の頭の中に呼びかけているの』

（俺がいた地球とは別の地球？どういうことだ？地球リセットは回避できたのか？）

『ええ、貴方の力と私の力で……そして貴方は消滅するはずの運命だったわ。けど、一人の少女の願いが貴方をこうして消滅せずに生きて行けるようにしたの。』

（願い？俺に一体何をさせようとしているんだ？）

『それは貴方が自分で見つけるのよ。ダン。ただ言えることは貴方なら彼女を救うことが出来る。それだけ……』

ダンが目覚めた場所はどこかの地下駐車場だった。そして手には未来で手に入れたバトルスピリッツのデッキ。その中には十二宮×レア全てが入っていた。

「デッキがある。けど、俺を呼んだ少女は……」

ダンは自分が成すべきことを見つげるために歩き出すのだった。

？

ダンはいしばらく歩いていると奇妙な空間に迷い込んだ。

「……は……」

「……か」

ダンはどこからとも無く声が聞こえ、声が聞こえた場所に向かった。そしてたどり着いた先には……

「ねえ、なんなのよ。この化物は……………」

「誰か……………助けて……………」

二人の少女を囲むヒゲを生やした怪物。

「何だ？あの生き物は。スピリットでも魔族でもない。」

ダン は少女たちを助けようとした。だが、今の自分に彼女たちを助ける力がないことに気がついた。

「くっ、どうすれば……………」

すると持っていたデッキが突然光りだし、ダン はデッキから一枚のカードを取り出した。そして引いたカードは……

「……………そうか、戦ってくれるんだな。太陽よ。炎を纏いて龍となれ。太陽龍ジークアポロドラゴン召喚」

カードから赤い龍が飛び出し、ダン はバトルスタイルにチェンジした。そしてジークアポロドラゴンは少女たちの前に向かった。

『グルルルルル』

「な、何？このドラゴンは……………」

青い髪の少女がジークアポロドラゴンの姿を見て怯えた。するとヒ

ゲの生き物は一斉にジークアポロドラゴンに襲いかかった。だが、ジークアポロドラゴンは尻尾で軽くヒゲの生き物をなぎ倒した。

「す、すごい。」

ピンク色の髪の少女がジークアポロドラゴンの強さに呆然としていた。するとヒゲの生き物が二人に襲いかかってきた。ダンは咄嗟に駆け寄り、二人をかばった。

「「きゃあ」」

「くっ、大丈夫か」

ダンヒゲの生き物の攻撃を喰らって、胸に輝くコアを一つ失った。

（この空間ではバトルフィールドと同じようにダメージを喰らうとコアが減るのか。）

ジークアポロドラゴンの猛攻はヒゲの生き物たちを直ぐに一掃するほどであった。そしてヒゲの生き物が全て消えると奇妙な空間が消え、ジークアポロドラゴンも姿を消した。

「一体アイツらは……」

ふっとダンは少女たちの方を見ると、少女たちはまだボォーとしていた。

「大丈夫か？」

「あ、はい。」

「あ、ありがとうございます。」

二人の少女はダンにお礼を言う。するとダンはピンク色の髪の少女が抱きかかえるものに気がついた。

「なあ、それは……」

「え、あの、この子は……」

「その子はキュウベえ、私の友達よ」

ダンたちの前に金髪の少女が現れた。金髪の少女はダンたちに微笑むと……

「私はバマミ。それにしてもすごい力ね。貴方は一体何者かしら？」

「俺は馬神ダン。」

「鹿目まどかです」

「美樹さやかです」

ダンたちは互いに自己紹介をする。するとまどかが抱いていた生物が目覚めた。

「やあ、マミ。」

「おはようキュウベえ。」

マミにキュウベえと呼ばれる生物はダンを見た。

「鹿目まどか。美樹さやか。突然だけど、僕と契約して魔法少女になってほしんだ。」

こうしてダンの新たな戦いは始まるのであった。

第2話 ダンの新しい出会い（前書き）

第2話です。今回は前回の続きから始まります。

第2話 ダンの新しい出会い

ダンにはキュウベえが自分のことを知ってることに不思議そうに金髪の女の子に聞いてみた。

「君はいつたい……」

「私はバマミ、見滝原中の3年生。そして、キュウベえと契約した魔法少女よ」

「あの…魔法少女って？」

青髪の女の子が疑問をいだきつつ質問をした。

「そのことに関して私の家に来て……貴方も馬神ダン」

「ああ、俺も色々詳しく聞きたい」

三人はその場を後にするのであったが、ダンを見つめる一人の少女がそこにいた。

「あれが………新たな来訪者。この世界はいつもと違うようね。」

3人はマミに家を案内され家に着いた。

「さ、入って」

「「おじゃまします」「」

「ああ」

マミに誘われ、4人はマミの家に入った。

「素敵なお部屋……」

女の子2人は部屋の中を見て驚いた。

「一人暮らしだから遠慮しないで」

「一人で暮らしてるのか？」

「ええ。ちょっとお茶いれるから待ってて」

「「はい」「」

「ああ」

マミが紅茶の用意をしにキッチンへと向かい、三人はテーブルに座ると2人の女の子がダンに問いかけた。

「まだ私たちの自己紹介してませんでしたね。私は鹿目まどかです。」

「あたしは美樹さやか。まどかとはクラスメイトです」

「……馬神ダンだ。」

「さっきは助けいただきありがとうございます。」

まどかは丁寧にお礼を言うとダンは微笑みながら……

「あれは……無我夢中でやったからな。もしもジークアポロドラゴンが来てくれなかったら、君たちを助けられなかった。」

「いやいや、それでもあのカツコイドラゴンは凄かったよね。まどか」

「は、はい。怖そうだったけど、」

「あれは俺の大切なカードだからな。」

三人が話しているとマミが紅茶を持ってきた。

「キュウベえに選ばれた以上、あなたたちも人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと……」

「……その前にキュウベえ。一つ聞いていいか？」

「なんだい？」

ソファアの上で座っているキュウベえを見つめるダン。するとダンは……

「俺は誰かが俺を呼んだって、ある人物から聞いたんだ。それは……お前か？」

「ふむ、興味深い話だね。だけど君のことは僕は呼んだりしてないよ。ただ、僕は君に宿る力については知ってる。」

「……………そうか」

ダンは再び黙り込んだ。まどかはそんなダンの様子を見て少し不思議に思った。

（何だかダンさん。クールな感じがするなあ）

話は少しずれたので、マミが話を戻すため、三人にあるものを見せた。それは小さな宝石みたいなものだった。

「うわあ、綺麗」

「それは？」

「これはソウルジェム、キュウベえが契約した女の子に与えられる宝石。魔力の源であり、魔法少女だっこのことの証よ」

「契約って？」

とさやか言葉にキュウベえが答えた。

「僕は君たちの願い事をなんでもかなえてあげる」

「え！？ほんと？」

「願い事って？」

「何だって構わない。どんな奇跡だっておこしてあげられるよ」

「金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか！？」

「いや、最後のは…」

「でも、それと引き換えにできあがるのがソウルジェム、これを手にしたものは魔女と戦う指名が与えられるんだ」

「魔女…？」

キュウベえの言葉を聞いて、ダンはさっき戦った化物について思い出した。

「さっき倒した奴らがそうなのか？」

「いいえ、違うわ。あれは魔女の手下。魔女を倒さない限り手下は再び人を襲うわ。」

「……………なるほどな。」

ダンとはマミの説明を聞き理解するとさやかはキュウべえに魔女の事を聞いた。

「それで魔女ってなんなの？魔法少女とは違うの？」

「願いから生まれるのが魔法少女なら魔女は呪いから生まれた存在なんだ。魔法少女が希望をまきちらすように魔女は絶望をまきちらす。しかも普通の人間には見えないからたちが悪い。」

「理由がはつきりしない自殺や殺人事件などかなりの確立で魔女が原因なの。」

「そんなやばいやつらがいるのになんで誰も気づかないの？」

「魔女はつねに結界の奥に隠れひそんでるからね」

マミたちが話している時、ダンは何かの気配に気がつき、窓から外を見るとマンシヨンの前にじつとこの部屋を見つめる黒髪の少女の姿を発見した。

（あれは……誰だ？）

少女は何だか悲しそうな表情をしていたが、ダンがこっちを見ているのに気が付き直ぐに立ち去った。

（一体何者だったんだ？）

「あの、ダンさん？どうかしたんですか？」

険しい表情をしていたダンにまどかは心配そうに話しかけた。

「いや、別に……」

「じゃあ、少しいいかしら？ダンさん。」

マミはそう言っただけ微笑むと、ダンが何を言いたいか直ぐに理解した。

「ああ、そうだな。君たちには見せたほうがいいな。バトルスピリッツを……」

ダンはその言っただけポケットから自分のデッキを見せた。さやかはカードに描かれたスピリットを見て興奮していた。

「凄い、カッコイイ奴がいっぱいだ」

「このカード色が全部違うのね。全部で6種類かしら？」

不思議そうに見るマミ。だけどまどかに至っては少し違った。

「このカードどこかで……」

「この世界にもバトルスピがあるのか？」

まどかの呟きを聞いて、ダンが反応するとマミとさやかは首を横に振った。

「いいえ、バトルスピリッツなんて聞いたことないわ。」

「うん、まどか。何か勘違いしてるんじゃないの？」

「そ、そうなのかな？少し前に何故か道に落ちてたの拾ったんだけど、ダンさんが持つてるカードに似てて……」

「とりあえず、見てみないと分からないからな。後で………」

ダンがまどかにカードを持ってきてくれないか頼もうとしたが、さやかはあることを言い出した。

「だったらまどかの家でしばらくお世話になったら？ダンさんもこれから住む家とか考えてないでしょ………」

「えっ、でも、パパとママが………」

「まどかのママとパパなら理由話せばOKしてくれるから大丈夫だよ。ねっ、ダンさんもそれがいいでしょ」

「……………まあ、俺はどこでもいいんだが……………」

こうしてダンは新たな出会いを果たすのであった。

そんな事があつた中、ダンが見かけた黒髪の少女……暁美ほむらは
ビルの屋上に立っていた。

「馬神ダン。あなたは……この絶望しかない世界を救ってくれる
のかしら？」

ほむらは手に持った二枚のカードを見つめた。それは紅い龍が描か
れたカードだった。

第2話 ダンの新しい出会い（後書き）

ほむらが持っていたカードとまどかが拾ったカードはダンのあのカードです。そのカードの事については後半あたりでやるつもりです。

第3話 プレイヴ（前書き）

更新が少し遅くなっています。第3話です。

第3話 プレイヴ

ダンがまどかたちの世界へ訪れてから一日が終わった。ダンはいまどかの家に居候することとなったが、まどかの両親に反対されるのではないのか思っていたさやかであつたが……

「ええ、まどかのお母さんとお父さん、ダンさんが居候することについて賛成したの」

「うん、ダンさんが今、帰る場所がないって言ったら、お母さんとお父さんが住む場所が見つかるまで住んでいいよって言ったんだ。」

まどかとさやかの二人はキュウベえと一緒にマミとダンの二人が待つファミレスに向かつていた。そんな中さやかはあることを思い出した。

「そういえば、昨日言ってたバトルスピリットのカードは見せた？」

「ううん、昨日見せようと思ったんだけど、どこに置いたか忘れちゃって、ダンさんは後でいいって言ってたから……」

「ふうん、あつ、着いたみたいだよ。」

まどかとさやかの二人はマミとダンが待つファミレスにたどり着くと、二人は中へ入っていった。

ファミレスに入るとあるテーブルにはマミとダンが待っていた。

「やっときたみたいだな。」

「そうね。」

「「お待たせしました」」

まどかとさやかの二人がそう言いながら、席に付くと……

「さて、二人も来たことだし、魔法少女体験ツアー第一弾、はりきっていきましょうか。準備はいい？」

「準備になっているかどうか分からないけど、もってきました」

さやかは包んであった布から金属バットを取り出した。

「何も無いよりはましかと思って」

「まあ、そういう覚悟でいってくれるなら頼もしいわ」

マミは少し苦笑いで言った。

「俺もデツキはしっかり持ってきた。」

ダンがそう言いながらデツキを見せると、まどかは申し訳なさそうにダンにこう言った。

「あ、あの、ダンさん。ごめんなさい。お母さんたちがいない間家事とかしてもらって……」

「いや、ただ住んでいるだけじゃ行けない気がしてな。別にまどかが謝る必要はない。そういえば、まどかはなにか持ってきたのか？」

「えっと、私は……」

とかばんからノートを取り出して、3人に見せた。それには自分の魔法少女姿の絵が描いてあった。

「うわあ……」

「とりあえず、衣装だけは考えておこうかと思って……」

「「ぶっ、はははははは」」

「え？ええ、」

とノートを見てさやかとマミは笑い出し、まどかは顔が赤くなった。

「うん、意気込みとしては十分ね」

「こりゃあ、参った。あんたには負けるわ」

「うう……………」

今から魔女退治に行こうというのに、まどか達は笑顔でいた。そんな三人の姿を見ていたダンは元の世界にいる仲間たちとの思い出を思い出していた。

（みんな、今頃どうしているんだろう？まゐも……………）

その後、ダンたちは初めて会った場所へ行き、魔女搜索のことをマ

ミから聞きながら、反応が強い場所へとたどり着くと、そこには廃ビルであった。そんな廃ビルの屋上で一人の女性が飛び降り、マミはその女性を助けたすと、

「なんだこれは？」

ダンは女性の首筋にある刻印に気がついた。

「魔女の口付け……………」

「ここに魔女が……………」

「ええ、行くわよ」

「分かった。」

四人は魔女の空間へと入り込むとダンに金色のバトルスタイルが装備された。どうやらバトルスタイルは限定された空間か、自分の意志で装備することができることにダンは気がつく、まどかとさやかの方を向いた。

「俺とマミじゃ二人を助けることが出来なかったりするかもしれない。だから、ブレイドラを召喚」

ダンが一枚のカードを取り出し、まどかとさやかの前に黄色に白い羽が生えたモンスターが現れた。

「わっ、かわいい。」

まどかはブレイドラを見て言うと…………

「ブレイドラ。二人を守ってやってくれよな。」

『きゅ〜』

ブレイドラはダンに返事をするように鳴いた。マミはというとさやかが持ってきた金属バットに魔力を込めた。

「気休めだけど、役に立つはずよ。」

準備を終えた四人の前には大量の魔女の手下が現れ、四人を囲んだ。

「ダンさん。行くわよ。」

「ああ、来い！ジークアポドラゴン。」

ダンの前に現れたジークアポドラゴンはマミと共に魔女の手下を撃退していくのであった。

そして四人は最深部へとたどり着くとそこには羽の生えたおぞましい姿をしたものがいた。

「あれが…」

「そう、あれが魔女よ」

「ぐろい…」

「あんなのと戦うんですか？」

「大丈夫、負けるもんですか！」

マミはさやかが持っていたバットでバリアをはって、マミとダンとジークアポロドラゴンは魔女に攻撃を仕掛けた。マミは帽子から何本か銃を出し、銃で逃げまよう魔女を撃ち、ジークアポロドラゴンは魔女に体当たりをしようとしたが、魔女は素早く動き出しジークアポロドラゴンの後ろに回り込み、攻撃を仕掛けた。

『ギャオオオ』

「ジークアポロドラゴン！？」

攻撃を受けたジークアポロドラゴンは地面に倒れてしまった。マミもまた油断して、魔女の手下に捕まり、銃を放つもはずれていった。

「ああ！」

「マミさん」

「大丈夫、未来の後輩にかっこ悪いとこ見せられないしね！」

とはずれた銃のあとから黄色い触手が出て、魔女を捕まえた。

「今よ。ダンさん。」

「ああ、砲龍バルガンナーを召喚！」

ダンの前にさらに一体のスピリットが召喚された。それは背中に巨大な砲門を背負った紅い龍だった。

「バルガンナーをジークアポロドラゴンにブレイヴ。」

バルガンナーが飛び上がると龍の姿から巨大な砲台に姿を変え、ジークアポロドラゴンの背中に合体した。

「行くぞ。ブレイヴスピリット。魔女を撃ち貫け！！！」

二本の砲台が動けずにいる魔女に狙いを定め、紅い弾丸が魔女を貫くのであった。

魔女を倒し、魔女の結界も解かれるとマミはあるものを拾い上げた。

「それは？」

「これはグリーンフシード。魔女の卵よ。」

「卵…」

「運がよければ、時々魔女が持つてるの」

「大丈夫、その状態は安全だよ。むしろ貴重なものだ」

「私のソウルジェム、タベよりにごってるでしょ」

「そういえば」

「このグリーンフシード使えば、ほら」

マミはグリーンフシードをソウルジェムに近づけて、ソウルジェムから黒い霧がグリーンフシードに吸い込まれた。

「きれいになった。」

「この前話してた、魔女の見返りってのがこれ」

とマミはグリーンフシードを投げ捨てた。そしてその方向には…

「あー!!」

そこには黒髪の少女がいた。ダンはその少女に見覚えがあった。

(あいつは、昨日の……)

「あなたにあげるわ。あと一度くらいは使えるはずよ。暁美ほむらさん」

(暁美ほむら……。それが彼女の名前か……)

「あいつ……」

「それとも、不服かしら?」

「あなたの獲物よ、自分のものにすれば」

とほむらはマミにグリーンフィードを投げ返し、それをマミが手とする。

「……………」

ダンはじつとほむらを見つめていると、ほむらがダンに向かって言った。

「貴方の力、見せてもらったわ。確かに強力な力だけど、あなたじゃ……………ヤツには勝てないわ。」

「奴?何のことかは知らないが、今日の戦いを見ただけでそう判断

するのは早いぜ。俺のデッキには13枚の神の力を宿したカードが眠っている」

「……そう、だけど、気をつけることね。あなたがどんなカードを持っていようと……ヤツには……勝てない。」

ほむらは途中に小声で何かを言った。ダンはそれを聞き取っていた。

（ワルブルギスの夜？何なんだ？）

こうしてダンたちの初めての魔女退治は終わりを告げるのであった。そしてこれがダンにとって悲劇を回避するための戦いが始まろうとしていた。

第3話 プレイヴ（後書き）

次回は原作の3話の話をやります。次回辺りに十二宮×レアを出す予定です。

第4話 願いの使い方（前書き）

お待たせしました。第4話です。今回は原作の3話の話に突入します。最初にいっておきます。マミさんは生存させます。

第4話 願いの使い方

初めての魔女退治から数日が経ったある日の夜。ダンたちは魔女狩りをしていた。

「ティロフィナーレ」

マミがとどめをさし、結界から元の場所に戻っていった。

「やっぱマミさんカッコイー」

「もう、見せ物じゃないのよ」

「わかってますって」

「今回はそこまで強くはなかったみたいだな。グリーンシードも落とさなかったみたいだ。」

ダンはあたりを見渡すがそれらしきものはなかった。

「今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね」

「ここんとかハズレばっかじゃない？ダンさんの新しいモンスター見てみたかったんだけどな」

さやかがそう言うとダンは苦笑いをしながら言った。

「さすがにそう簡単に新しいモンスターを呼ぶ必要はないくらい。」

「マミのサポートが良かったみたいだからな。」

まどか達はまだジークアポドラゴンしか見たことがなかった。ダンがいうにはあと二体のエーススピリットがいるらしいが、ここ最近戦ってきた魔女はそれだけで十分戦える強さだということだ。

「使い魔だって、成長すれば魔女になっちゃうの。放っておけないのよ。さ、帰りましょう」

三人がそう言って帰ろうとする中、ダンはこの間会ったほむらが言っていた言葉を思い出していた。

「ワルプルギスの夜。一体何なんだ？」

ほむらが言っていた謎の魔女の存在について、ダンは少し気になっていたのであった。

四人が帰る途中、マミがある質問をした。

「2人とも願い事決まった？」

「うーん、まどかは？」

「私も……………」

「まあ、そういうものよね。いざ考えると」と

「マミさんはどんな願い事したんですか？」

聞いたとたんマミは深刻な顔をしてまどかは少しあわてていった。

「いや、あの…、どうしても聞きたいってわけじゃなくて…」

マミはやさしく微笑み言った。

「私の場合は…」

と自分が願い事をしたときの話をしていると、ダンは隣を歩くキュウベえに話しかけた。

「なあ、キュウベえ、ワルプルギスの夜って何なんだ？」

「どうして君がその名前を知っているのかい？」

「ちょっとな。それでそいつは一体………」

「そうだね。まだ僕も詳しいことは知らないけど、ワルプルギスの夜は災厄の魔女だっていうことだよ。」

「災厄？」

「まあ、どんなものかはまだよくは知らないけどね。でも、君が持つ13枚のカードなら倒せると思うよ。」

ダンには自分のデッキに眠る13枚のカードを思い出した。それは神に近い力を持ったカード。もしもそのワルプルギスというやつと戦う時が来たら……

「あの、ダンさん？」

ふっと、考え事しているとまどかが心配そうにしていた。

「ん、どうしたんだ？」

「いえ、何だかデッキ見つめてたんで……ちょっと気になっただけです。」

「そっか、俺はただ考え事をしていただけだ。」

「そうですか。」

ダンとまどかがそんなことを話していると、さやかがマミにあることを聞いた。

「ね、マミさん、願い事って自分の事柄じゃないと駄目なのかな？」

「え？」

「たとえば、あたしなんかよりよほど困ってる人がいて、その人のために願い事するのは……」

「それって上條君のこと？」

「た、たとえ話だよ」

「知り合いか？」

「お友達です」

「別に願い者自身の対象になるわけじゃないけどね」

「でも、あまり感心できた話じゃないわ。他人の願いをかなえるなら、自分のことを考えておかないと。美樹さん、あなたは彼に夢をかなえてほしいの？それとも彼の夢をかなえて恩人になりたいの？」

「マミさん……………」

「同じことでも全然違うことなのよ。」

とさやかが少し黙っていた。

「ごめんね、でも今のうちに言っとかないと……………」

「さやかちゃん」

「…そうだね、あたしの考えがあまかった。ごめん」

「やっぱり、難しい事柄よね。あせって決めることじゃないわ」

「僕としては早く決めてくれれば助かるんだけどね」

「だめよ、女の子をせかす男子は嫌われるぞ」

四人が帰ろうとしている時、ほむらはそんな四人の姿を見つめていた。

「……………まどか。きっと貴方のことを救ってみせる。」

ほむらがそう呟いていた。すると、ほむらの周りに一匹の緑色に輝く蝶が舞っていた。

「分かってるわ。この二枚は時が来てから渡す。それがあなた達との約束だものね。」

第4話 願いの使い方（後書き）

あんまり話が進んでいませんが、次回辺りシャルロットとの戦いが始まります。

第5話 魔女vs天蠍神騎&巨蟹武神（前書き）

さて、ついにシャルロットの登場です。どうマミを救出するかはお楽しみに、

第5話 魔女vs天蠍神騎&巨蟹武神

まどかの家でダンが家事を全て終わらせると、まどかの父、知久がダンある頼みごとをした。

「あつ、ダンくん。悪いんだけど、買い物行ってきてくれないかな？」

「ああ分かった。」

「いや、悪いね。色々と家事を手伝わせて……」

「俺は居候の身だ。これぐらいはしないとな。」

ダンはその言いながら、知久から買い物リストが書かれているメモを受け取るのであった。

買い物を終えたダンは病院近くを歩いていると、そこでばったりとまどかとさやかとの二人と出会った。

「あつ、ダンさん。」

「ダンさんは買い物帰りですか？」

「ああ、二人は？何か病院から出てきたみたいだけど、誰かのお見舞いか？」

「さやかちゃんのお友達のお見舞いです」

「そうか」

するとさやかは何故かふてくされていた。

「でも、都合悪くて会えなかったんです」

「まあ、検査か何かだったんだろ。だったらまたいつでも会えるさ。」

ふっとまどかは何かに気がついた。それは……………

「どうした？」

「あれって…」

ダンとさやかがまどかが指を差した方を見るとそこにはグリーンフシードが壁に埋まっていた。

「グリーンフシードだ。孵化しかかってる。」

まどかの肩に乗っていたきゅうべえがグリーンフィードの状態を確認して言った。

「魔力の侵食が始まっている。結界が出来上がるまでココから逃げよう。」

その時、さやかが首を振っていった。

「駄目だ。魔女が病院に取りついたらやばいって……………マミさんが言ってた。」

「確かにヤバイな。」

「ここは私が見はっておくから、まどかはマミさんの所へ」

「でも…」

「無茶だよ。孵化にはまだ早いけれど、結界に閉じ込められたら、君は出られなくなる」

「でも、放って置けば逃げられちゃうでしょ」

「しかし…」

キユウべえは考えてさやかの肩に乗り

「わかった。僕も一緒に残ろう。結界迷路に閉じ込められてもマミとならテレパシーで僕とさやかの位置を伝えられるから」

「キユウべえ…」

「わかった」

「だったら、俺もマミの所へ行く。さやかたちには……こいつだ。」

ダンはそう言って、デッキから一枚のスピリットを召喚した。それは……

「ジークアポロドラゴン。さやかたちを守ってくれ。」

まだ魔女の結界の中ではないので顕現していないジークアポロドラゴンだが、ダンがジークアポロドラゴンを魔女の結界内に召喚したのだ。

「行くぞ。まどか」

「はい」

まどかとダンはマミの元へと向かうのであった。

数分後

「ここね」

まどか達はマミを連れて戻ってきた。3人は結界の中に入った。

（キュウベえ、状況は？）

（大丈夫。すぐ孵化はしないから。急がなくていいから、なるべく静かにきてくれるかい？大きな魔力を使って卵を刺激するのはまずい！）

（わかったわ）

テレパシーできゆうべえと会話した後、マミはダンに向かって注意をした。

「ダンさん。美樹さんの所にジークアポロドラゴンを送り込んだんですよね」

「ああ、守る奴が必要だろ」

「まだ攻撃をしないようにして、このまま離れていたらいくら皆さんの強力なスピリットでもやられてしまうわ。」

「分かった。」

「まったく、無茶すぎっていいんだけど、今回に限っては…！」

その時、ほむらが3人の目の前にいた。

「またあなたね、暁美ほむら」

「今回の獲物は私が狩る。もちろん結界内の3人の安全は保障する」

「だから手を退けって？私が信用するとでも？」

マミは魔法でほむらを縛り付けた。

「ば…バカ！こんなことしてる場合じゃ……」

「怪我させるつもりは無いけど、暴れたら保障しかねるわ。行きましょう、鹿目さん、ダンさん」

「はい…」

「あ…ああ…」

「待ちなさい！今度の魔女は…これまでと訳が違う」

ほむらの忠告を無視してまどかとマミは結界の奥に進んで行ったとき、ダンは一立ち止まり、ほむらの元へと戻った。

「暁美ほむら。お前がさっき言ったのは本当か？」

「え、ええ、そうよ。今回の魔女はかなり危険。どうして分かるかは教えられないけど………」

「いや、お前の目を見れば分かる。お前は嘘をついていないし、マミたちを心配してここに来たんだろ。だったら……」

ダンはそう言っ、一枚のカードを取り出すと、ほむらを縛っていたマミのリボンを蒼い鎌が全て切り裂いた。

「行くぞ」

「ええ、」

ダンとほむらは一緒に魔女の元へと向かったのだった。

結界の奥へたどり着くと丁度マミがヌイグルミみたいな魔女に止めをさそうとしていたが、ダンがマミの様子がおかしいことに気がついた。

（マミの奴？何か様子がおかしい。調子が良すぎる。）

「マズイわ。あの魔女は……………」

ほむらが何かを言いかけた瞬間、ヌイグルミの魔女の口から巨大な大蛇のようなものがでてきた。

「え…？」

魔女はマミの近くに行き、マミを喰らおうとした。まどかとさやかが恐怖のあまり目を閉じる。だが、まどかは恐る恐る目を開けると魔女はマミを喰らっていなかった。

「マミさん？」

「まどか！あそこ！」

さやかが指さし方を見るとケーキの山の上にほむらがマミを抱き抱えていた。

「……………曉美さん。あなた……………」

「油断しすぎよ。」

「う、ごめんなさい。」

マミがほむらに謝っていると魔女は再びマミとほむらに襲いかかってきた。だが、ジークアポドラゴンが魔女の尻尾を掴み、マミ達の元へと行かせないようにした。

「悪いが、ここで終わりにするぞ。魔女。」

『ガアアアアアアアアア』

ジークアポロドラゴンが雄叫びを上げながら、魔女の体を噛み付く。すると魔女は反撃としてジークアポロドラゴンの顔を食らいつき、ジークアポロドラゴンは姿を消した。

「スピリットを食べやがった。」

『 ？ 』

魔女はおかしな事を言いながら、ダンに向かって大きく尻尾を振ると、ダンが壁まで吹き飛ばされてしまった。

「くう、コアが二つ削られた。どうやら、威力が大きければ大きいほど、コアが減るのか。」

ダンのピンチを見ていたまどかとさやかは……

「ど、どうしよう。あのドラゴンがやられちゃった。」

「マミさんも何か腰抜けしちやってるし、転校生はじっと見てるし……どうしよう」

焦る二人。こういう場合にキュウベえが契約などというはずであったが……

「どうやら、馬神ダンのデッキに眠るスピリットが目覚めるみたい

だね。」

「「えっ？」」

「こんな強敵なら、こっちは出し惜しみする必要はないな。古き神よ、今こそ甦れ！天蠍神騎スコル・スピア。巨蟹武神キャンサード。」

ダンが二枚のカードを出した瞬間、魔女の前にさそり座とかに座の星座が浮かび上がり、そこから蒼く巨大なサソリのスピリットと強固な鎧を身に纏ったスピリットが現れた。

「あれが、十二宮Xレア。ワルプルギスに対抗できるかもしれないもの」

ほむらは二体のスピリットを見てそう呟いた。

「行け！スコル・スピア。キャンサード！奴を切り裂け」

ダンが二体のスピリットに呼びかけた瞬間、二体のスピリットは魔女の尻尾を巨大なハサミで切り取った。魔女は苦しみながらも、二体のスピリットに襲いかかる。だが、キャンサードのハサミが魔女の口を切り裂き、開けっ放しになった魔女の口目掛けてスコル・スピアは尻尾から蒼いレーザーを発射させ、魔女を貫き、魔女は爆発した。

魔女を倒し終えたダン達。するとマミはさっきの魔女から手に入れたグリーンシードをほむらに渡した。

「今回は貴方のお陰で助かったわ。これはあなたのものよ」

「……私別に、あなたがあのままやられていたらこれから来る魔女に対抗する戦力が無くなると思ったから……」

「ふふ、そういう事しておくわ。でも、グリーンシードはちゃんと受け取ってもらうわ。」

「ええ、」

こうしてマミのピンチを救うことが出来たダンとほむらであったが、
そんな中まどかは……………

（今回はダンさんとはむらちゃんがいいたから助かったけど、もしも
あの二人が助けに来てくれなかったら……………）

まどかは魔法少女の憧れが少しずつであるがなくなしつつあったのだ
った。

第5話 魔女vs天蠍神騎&巨蟹武神（後書き）

マミ救出は最初はダンが庇うとか考えていたのですが、何かダンの性格を考えて、ほむらを助けるかなと思い、ほむらにマミの救出をやらせました。

第6話 黒き星籠と赤い魔法少女（前書き）

お待たせしました。第6話です。今回はまどかの原作の4話の話に入りますが、ちょっとあるスピリットを出したくなったので、出します。なのでちょっと話をカットします。

第6話 黒き星龍と赤い魔法少女

十二宮Xレアを使用して、魔女を倒した次の日、まどかの様子にダンは心配していた。

（やっぱり、昨日の戦いが原因なんだろうな。もしほむらと俺が間に合ってなかったら……マミは確実に死んでたはずだ……憧れていた魔法少女の仕事が死と隣り合わせだって知ったからな。）

ダンはそう思いながら、頼まれた買い物が続けていたのだった。だが、何かの視線に気がついた。

（なんだ？今の視線は……殺気に近い感じが……）

ダンはあたりを見渡すが、ダンに対して殺気を出している相手を探すが、それらしき人物は見つからなかった。とりあえずダンは人通りの少ない場所へ移動した。

（もし、さっきの視線が本物だったら……こんな人通りの多い商店街じゃ、他の人を巻き込む。それなら……）

ダンはしばらく走り、人がいないビルの廃墟に入ってしまった。そしてダンは……

「出てこい。ここなら人がいない！」

「ふう〜ん、キュウベえから話聞いてたけど……なかなか面白いやつじゃん。」

ダンが声が聞こえた方を見るとそこには赤髪の少女が一人いた。一見普通の少女に見えるが、だが、少し違った。それは、少女の手には槍が握られていた。

「お前…………魔法少女か？」

「まあ、そんな所、キュウベえからこの街にいる魔女がちょっと手強いらしく、マミー人じゃ手が足んないらしいから、来てみたけど、なかなか面白そうな奴がいるじゃん。」

「ようするに腕試しか。わざわざ殺気の混じった視線を出してたのはそういう事か」

「視線？何のことだ？あたしはあんたがここに入るのを見かけたから…………こうして…………」

少女がそう言った瞬間、突然二人がいた廃墟が奇妙な空間に変わった。

「この空間は…………まさか！」

「どうやらあんたを見ていたのは人間に取り付いた魔女みたいだな。まあ、ちょうどグリーンフィールドがなかったから稼げそうだな」

少女は槍を構えて言うと、ダンもデッキを取り出した。

「とりあえずここから脱出するために俺も協力する」

「へっ、お前の力見せてもらうぜ。馬神ダン」

ダンと少女は一緒に空間の奥へと進んでいった。

二人が空間の最深部へとたどり着くのだが、奇妙な感じがしていた。
「ずっと奥へ進んできたが、手下が全く出てこないのはおかしい気がする。」

ダンがそう言っていると少女が答えた。

「生まれたばかりの魔女だからつう理由じゃないのか？あたしも魔女の事情についてはよく知らないけどさ。とりあえず、さっさとこの空間抜けようぜ。」

少女がそう言つて、最深部に入るための扉を開けた。最深部には何の景色も物も置いて無く、ただ白い空間が広がっており、そこには今まで化物じみた姿をした魔女ではなく、黒いワンピースを身に纏つた少女がいた。

「こいつが魔女か？何か今までの奴とは違うな」

赤髪の少女が魔女を見ながら言うと、魔女はゆっくりと微笑み、言つた。

「こんにちわ。魔法少女さんと貴方は……………馬神ダンですね。私は『無の魔女』名前は無いわ」

（この魔女、普通に喋っている。今までのやつとはかなり違う気がする……………）

「人間型だろうが何だろうが魔女とは変わらない。退治させてもらうぜ！」

少女がそう言いながら、無の魔女に槍を突き刺そうとした。だが、魔女に攻撃が当たる瞬間、槍の刃が消えた。

「なっ、」

「ごめんなさい。貴方の攻撃は消させてもらいました。」

魔女がやんわりと微笑んだ。すると少女が後ろへ下がった。

「こいつの能力、あらゆる物を消し去る能力か!？」

「正解です。私の魔女としての能力は『無』ありとあらゆる物を消し去る力です。なので手下とか作っても私の力で全部消えちゃうんです」

魔女は笑顔でそう言うが、ダンたちにとってはかなり危険な相手だった。

（全部消し去る能力。どうすれば……………だけどコイツを野放しにしておく訳にはいかない。ここは……………）

ダンデッキから一枚のカードを引き、召喚した。

「ジークアポロドラゴン。魔女を討て！」

ジークアポロドラゴンが召喚され、魔女に向かって炎を出して攻撃するが、魔女に当たる前に炎がかき消された。

「無理です。私を倒すのは……………なので、今回は貴方をお願いがあるんですよ。馬神ダン」

「願い？なんだ？」

「私たち魔女は貴方が言うスピリットに近い存在です。私も果たされなかった願いがあるのに魔女となってしまうました。ですが貴方が使うそのスピリットを召喚する力で私を貴方のスピリットとして戦わせてください。」

魔女のともない願いを聞いていた少女が魔女に対して怒鳴った。

「てめえ、魔女のくせに何でそんなアホみたいな願いを言うんだよ
！！」

「あなた、知らないみたいね。魔女の元々の姿について、まあ、い
ずれ知ることになるわね。とりあえず馬神ダン。私の願い聞いても
らえますか？」

ダンは魔女からの願いを聞いて、少し考え始めた。

（魔女とスピリットが近い存在。それにこの魔女、魔法少女につい
て俺たちが知らないことを知ってる。それにこの能力……仲間
にする必要はあるかもしれない）

「分かった。お前を俺のスピリットにする。どうすればいい？」

「ありがとうございます。とりあえず、この子と戦って勝利すれば
この子がいたカードに私が入ることができるので、」

魔女がそう言っ、一枚のカードを取り出した。

「これは闇の力をもったカードの一つ。力が強いせいで私の力では
消すことが出来ませんが、調度良かったです。では、行きます。光
滅ぼす闇の魔王！ 滅神星龍ダークヴルム・ノヴァ召喚！！」

突然空間が黒に染まるとそこから白く輝く翼を生やした黒いドラゴ
ンがその姿を現した。ダンはそれを知っていた。

「まさか、ダークヴルム・ノウア。」

「では、お願いしますね。」

第6話 黒き星龍と赤い魔法少女（後書き）

とりあえずオリキャラというか、オリカになるかもしれない魔女の登場です。なんで出したかというと、さやかが魔女化した時のためのものです。

第7話 太陽龍VS滅神星龍（前書き）

お待たせしました。今回でこのバトルは終わります。

第7話 太陽龍vs滅神星龍

ダンと赤い魔法少女の前に現れたのは、ダンを何度も苦しめた黒き星龍であった。

「ダークヴルムがこの世界に……………どういうことだ。名も無き魔女」

『このカードは、少し前に私のテリトリーに落ちてました。そして私はこのカードから感じる恐ろしい力を感じ取りました。このカードは私達魔女と同等の力を宿します。』

「魔女と同じ力を……………お前は自分をカードに封じて一緒に来て欲しいと言っていたな。何故このカードを倒す必要がある！」

『先程も言ったとおり、これは力試しとこのカードはしばらくしたら魔女として活動を始めます。そうしたら、ワルプルギスが来る前に世界は滅びますね。』

少女は笑みを浮かべながら言った。ダンはというと……

（またワルプルギス。キュウベエに聞いたが災厄の魔女としか聞いてない。一体奴は何なんだ。とりあえず今はこのダークヴルムを倒すのが先だな。）

「ジークアポドラゴン！さらにバルガンナーを召喚。ジークアポロドラゴンにバルガンナーをブレイヴ！」

ブレイヴ状態のジークアポドラゴンはダークヴルムに向かって攻撃を仕掛けた。だが、ダークブルムは攻撃を瞬時に避け、ジークア

ポロドラゴンの首に噛み付いた

『ガオオオオオオ！！』

ジークアポロドラゴンは雄叫びを上げながら、ダークヴルムの噛み付きを振りほどこうとしたが、ダークヴルムの牙は深く食い込んでおり、上手く振りほどけないでいた。

（くっ、さすがはダークヴルム。この魔女空間では本来の力を発揮することができないとはいえ、ノヴァの力を持つだけはある！！）

ダンが次の一手を考えていると、ダークヴルムの額に槍が突き刺さった。

「なんだか面白そうだな。あたしも混ぜろ」

槍を突き刺したのは赤い魔法少女だった。

「気をつける。こいつは魔女の力を持つ上にかなりの能力を秘めている！」

「安心しな。あたしのサポートはここまで、あんたの龍は無事抜けだしたみたいだ」

ダンがジークアポロドラゴンを見ると確かに噛み付きから解放され、自由に動けるようになったジークアポロドラゴン。

「よし、ブレイヴ解除！」

ダンがジークアポロドラゴンとバルガンナーのブレイヴを解除し、

新たに刃狼ベオ・ウルフを召喚した。

「ベオ・ウルフをジークアポロドラゴンにブレイヴ。行け！ブレイヴスピリット」

ジークアポロドラゴンの体にある白い宝玉が緑色に変わり、両手には二本の巨大な剣が握られた。

「行くぞ！ジークアポロドラゴン！ダークヴルム・ノヴァにアタック！」

ジークアポロドラゴンは空へと飛び上がり、ダークヴルムに向かって剣を振りかざした。だが、ダークヴルムはその剣を受け止めて、回転し、ジークアポロドラゴンを投げ落とした。

ジークアポロドラゴンは立ち上がり、さらに攻撃をしてきた。ダークヴルムは黒い炎を放つがジークアポロドラゴンはベオ・ウルフの二本の剣で炎を切り裂き、ダークヴルムに剣を突きさしたのだった。

魔女の空間が解け、さっきまでいた廃墟に戻ったダン。するとさっきまで一緒にいた赤い魔法少女の姿が消えていた。

「あいつ、お礼言いたかったんだけどな。」

『あの子にはあの子のやるべきことがあるのですよ。ダン』

突然、どこからともなく声が聞こえ、ダンがポケットに入ったデッキを取り出すと一番前に名も無き魔女のカードがあった

「お前……」

『ダークヴルムは呪いから解放され、姿を消しました。そして空白となったカードに私が入りましたのです。これからは魔女退治に協力します。ダン』

「いいのか？お前にとって同胞を殺すもんだぞ」

『ああ、実は私が魔女というのは嘘です』

「はあ？」

『私はある者たちの意思によって生み出された精霊です。その方たちに貴方がワルプルギスを倒せるかどうか確かめるためにコンタクトを取りました』

「ある者たち？誰だそれは……」

『それはいずれ知るでしょう。』

「いずれか……ところでお前のことはこれからなんて呼べばいい？名前ないんだろ」

『そうですね。私のことはクリアとお呼びください』

クリアは笑顔でそうだったのであった。

第7話 太陽龍VS滅神星龍（後書き）

次回は本編に戻ります。

第8話 新たな魔法少女（前書き）

やっと原作の話に戻ります。今回は第4話の後編の話となります。

第8話 新たな魔法少女

ダークヴルムを撃退し、そしてダンの肩には新たなパートナー・クリアが乗っていた。今は頼まれていた買い物を済ませ、鹿目家に帰ろうとしていた。

「そういえば、クリア。お前の姿は俺にしか見えないのか？」

「そうだよ。私の本体はダンのデッキの中にあるし、まあ、今の私は精神体みたいなものだよ。」

「なるほどな。なら、見つかることないか。とりあえず早くかえ……ん？」

ふっとダンは何かに気がついた。それは、ちょっと離れた場所にまどかが誰かと一緒にいるところだ。

「まどか、何やってるんだ？それにあの大人数……」

「ダン、あの集団から私と同じ魔法の匂がするよ!」

「魔法だつて、まさか……」

ダンは急いで、後を追ったのだった。

まどかは仁美に連れられ、廃工場の中に入ると、そこには一人の男がパイプ椅子に座っていた。

「今の時代に俺の居場所なんて……あるわけねえんだ」

男の目の前には何かの液体が入ったバケツがあつた。そして、エプロンの纏った女性が洗剤をバケツの中に入れようとした。まどかはあることに気がついた。

（あれって……まさか……」

それは塩素系の洗剤だつた。このままだとまずいと思ったまどかは止めに入ろうとした瞬間、仁美に止められた

「邪魔してはいけません。これは神聖な儀式なんです。私たちはこれから素晴らしい場所に行くんです。」

仁美がそういうと周りの人々が拍手した。まどかは仁美の手を振り

ほどき、バケツを奪い、窓から外に投げ捨てた。

「これで、安全……じゃない。」

仁美達はまどかを睨んだ。まどかは物置に逃げ込んだ。だが、その瞬間、空間が歪んだ。そこにはテレビに写りこんだ魔女と天使の人の形をした手下がいた。

「いや、いやあああああああああああああ」

魔女がまどかに襲いかかるうとした瞬間、

「うおりゃあああ!!」

何本もの剣が魔女に突き刺さった。

「大丈夫？まどか？」

そこには魔法少女の姿をしたさやかがいた。

「さやかちゃん。もしかして……」

「あはは、魔法少女になっちゃった。でも、まどかのピンチに間に合ってよかったよ。後は任せて!」

さやかが魔女と対峙すると、魔女の手下が一斉にさやかとまどかに襲いかかった。さやかは手下を撃退しようとした瞬間、

「マジック！サジッタフレイムを発動!」

無数の炎の矢が降り注ぎ、手下たちを一気に撃退した。まどかとさやかは声が聞こえた方を見るとそこにはダンとジークアポドラゴンがいた。

「大丈夫か？二人とも！」

「ダンさん！？」

まどかはダンの姿を見て、安心するが、魔女はジークアポドラゴンに攻撃を仕掛けてきた。

「ジークアポドラゴン！薙ぎ払え！」

ダンの指示を聞き、ジークアポドラゴンは魔女の攻撃を尻尾で薙ぎ払った。

「よし、さやか、一気に行くぞ！」

「任せて！」

ジークアポドラゴンとさやかは同時に魔女に接近し、ジークアポドラゴンの炎が魔女を焼き、魔女はその炎から逃れようとした瞬間、さやかの剣が魔女を切り裂いた。

魔女を撃退したことで空間が元に戻り、ダンたちは操られていた人々を介助していると、そこにマミとほむらの二人がやってきた。

「あなた……」

「美樹さん。まさか契約したの」

「マミさん、はい、キュウベエと契約しました！」

「そう、」

マミは何故かさやかの姿を見て少し落ち込んでいた。ふっとダンはほむらの方を見るとほむらは……

「彼女が魔法少女になるのは逆らえない運命なのね……」

そうつぶやき、工場から出て行った。ダンはそんなほむらの後を追

うのであった。

「ほむら！」

ほむらに追いついたダンはほむらを呼び止めた。

「何か用？」

ほむらはダンの方を振り向いた。ほむらの表情は少し悲しそうに見えた。

「ずっと気になっていた。お前、何か知っているのか？」

「何かって？」

「お前の言葉を聞いていて思った。お前は何かを諦めている気がする

る！一体これから先何があるっていうんだ！」

ダンほむらに向かって言うと、ほむらは黙ったまま歩き出し、そしてこういった！

「あなたはいずれ知るわ。魔法少女の運命を……世界の終焉を……そして、あなたはそんな運命を打ち破る力を持っている。それを覚えておく必要があるわ」

ほむらはそう言い残し、姿を消すのであった。ダンほむらが消えた方をただ見つめていた

「魔法少女の運命……世界の終焉……ワルプルギスと関係があるのか？」

第8話 新たな魔法少女（後書き）

次回は杏子がちゃんと登場します。さらにダンの二枚目のエースも登場です

第9話 再会の魔法少女（前書き）

ついに杏子の登場です。さらにダンの二体目のエースが登場します。

第9話 再会の魔法少女

さやかが魔法少女となってから数日が経ったある日の夕方。ダンにはほむらのことを探していた。

（やっぱり、マギサが言っていた死ぬはずの俺をこの世界に呼んだ少女はほむらなのか……）

ダンはそう思いながら、街を歩きながらほむらの姿を探していた。すると後ろから……

「あれ？ダンさん？」

声をかけられ、振り向くとそこにはまどか、マミ、さやかの三人とキュウベえがいた。

「みんな、魔女退治か？」

「はい、まだ私も初心者だからマミさんに色々とコツを聞きながらですけど……」

「ふふ、魔法少女が一人増えたんですもの。ここは先輩として色々なことを教えなきゃね」

マミは嬉しそうにいう中、ダンはまどかの側に寄った。

「まどか、いいのか？この間の一件で魔女の怖さを改めて知ったんじゃない……」

「はい、マミさんが殺されそうになった時も、この間の時も魔法少女の勤めが凄く怖くなったんですけど……さやかちゃんのが色々心配で……」

「そうか」

ダンは微笑みながらまどかの頭を撫でた。まどかは少し恥ずかしそうにしていた。

「あの、ちょっと思っただんですけど、ダンさんは何で魔女と戦うんですか？私と違って巻き込まれたとかそういう感じなくて……その、何かのために戦っている気がして……」

「そうだな……俺は誰かに呼ばれたらしいから、その呼ばれた理由をするために戦ってる。今のところはそんな感じだ」

「理由を知るために……もしも魔女との戦いが終わったらダンさんは元の世界に帰るんですか？」

「ん？どうだろうな。もしかしたら帰れずにずっとここにいるかも知れない。」

「もし、良かったら、私が魔法少女になるための願いを……『ダンさんが元の世界に帰れますように』ってお願いにします」

「いいのか？願いは自分のために使ったほうが……」

「はい、でも、やっぱり自分があるべき場所に帰れたほうがいいと思って……」

「そっか、ありがとうな。まどか」

二人がそんな話を話している内に、マミとさやかは魔女の反応を感じた。

四人が近くの路地裏に入った瞬間、魔女の結界に入り込んだ。そこには子供の落書きのような魔女が飛んでいた。

「マミさん。ここは私に任せてください」

「あら、自信満々ね。いいわ、任せるわ」

さやかはマントから何本もの剣を取り出し、魔女に向かって放つ。

魔女は必死に逃げ出した。そしてさやかが放った剣の一本が魔女に突き刺さるうとした瞬間、何かが妨害し、魔女に逃げられた。

「えっ、」

「今の武器は……」

「全く、使い魔なんて倒しても意味が無いのに、」

ダンたちの前に現れたのは、ダンが以前出会った少女だった。

「お前は……」

「ん？ああ、あの時の……それにマミもいるのか。」

「久しぶりね。杏子」

「知り合いなのか？」

「ええ、彼女は佐倉杏子。私達と同じ魔法少女よ。魔女退治でちょっと知り合っただけ……杏子、あなたも変わらないわね。」

「お前もその甘い考え……相変わらずだな。まあ、今回はアンタと戦うつもりはないけど……」

杏子はそう言って、紅い結界を張り、さやかだけを閉じ込めた。

「その馬鹿な新入りを倒そうと思ってね。」

杏子はさやかに襲いかかった。それを見たキュウベえは……

「はじまるね、魔法少女同士の戦い……！」

「どうして止めないのきゅうべえ、これじゃあただの殺し合いだよ」
キユウベえはなんともないかのように答えた

「どうしてだい？彼女たちはそう望んで戦っているんだ。」

さやかは杏子に向かっていこうとする。だが杏子は槍でさやかの攻撃を弾き、吹き飛ばした。

「全く弱いくせにいきがって、そういうことは教えてなかったの？
マミ。強い奴にあつたら戦わずに逃げろって」

「私たちは協力するべきよ。杏子。こんなこと無駄なだけ」

「へえ、言っじゃん。」

さやかが立ち上がり、再度杏子に向かっていった。それを見たダンは……

「まずい、さやかのやつ。頭に血が上ってる！マミ、結界を破るから、あの二人を止めてくれ」

「分かったわ。」

ダンはデッキから一枚のカードを引いた。そのカードは……

「お前も力を貸してくれるか。駆け上がれ、神の名を持つ赤き龍！

太陽神龍ライジング・アポロドラゴン召喚！」

太陽の光が路地裏を照らすと、そこから赤い龍が現れた。それはダンが持つエースカードの一つ、ライジング・アポロドラゴンだった。ライジング・アポロドラゴンは杏子が張った結界に突進をし、いとも簡単に結界を破壊した。そして結界が破壊されたと同時にマミが戦っている二人を黄色いリボンで縛り上げた。

「ごめんなさい。これ以上こんな戦いを続けるようだったら……今縛っているリボンを……きつくするわ。」

マミは戦っている二人に脅しをかけた。するとさやかは持っていた剣を落とした。

「う、ごめんなさい。マミさん」

さやかが謝るとマミは微笑み、さやかを解放した。そして……

「あなたはどつするの？」

「ちっ！さすがにマミと馬神ダンが加わったら勝ち目がない」

杏子はそう言って、槍を閉まい、ダンに話しかけた。

「今回はその新入りがどんな感じか見に来たのと、馬神ダン。あなたに確かめて欲しいものがあるんだ。」

杏子はそう言って、一枚のカードをダンたちに見せた。そのカードは黒いフードを被り、赤い腕に鋭く尖った爪を持つスピリットの力

ードだった。

「これは……魔界七将ベルドゴール！杏子、これ、どこで……」

「前にあんたと会った後にどっかの魔女と戦った時にグリーンフシードとこれを落としていった。あんたが使ってるカードに似てるから一応拾つていたんだけど……」

「でも、何で……」

ダンがそう言った瞬間、デッキの中からクリアが現れた。

『見せて、ダン。』

「ダンさん。彼女は？」

クリアを見て、驚くマミ達。ダンにはクリアの事を話した。

「元魔女だったんだけど、コイツを縛っていたものを倒した時に俺のスピリットとしているんだけど……それよりクリア、何か分かるか？」

『うん、このカードもダーク・ヴルムと同じようにこっちに来て魔女が取り込んだものみたいだけど……』

「まあ、直ぐに分らないみたいだからあたしは帰るよ。あと新入り、次会ったときにはその甘い考えを捨てることだね。」

杏子はそう言い残して、どこかへ立ち去った。さやかは杏子が消えた方をじつと睨むのであった。

一方ダンたちがいる路地裏を上から眺めているほむらがいた。

「どうやら時間を渡り歩いた結果、馬神ダンが来た。でも、それと同時にワルプルギスも新たに力を身につけ、7体の魔女を従えたみたい。一体は佐倉杏子が倒し、もう一体はすでに私が倒した。残りは五体……」

ほむらの周りに緑色の蝶が二匹飛び回った。ほむらはその蝶に呟いた。

「分かっているわ。このカードは全て揃えて彼に渡すわ。あなた達との約束……忘れないわ。……き、……っ」

ほむらは二枚のカードを見つめながらまどかを見た。

「きっと、今度こそ……」

第9話 再会の魔法少女（後書き）

だんだんと明かされていく謎と深まる謎でした。魔界七将はワルプルギスとの戦い前に何体か出す予定です。ワルプルギス戦では異界王のあの最強カードと魔界七将を束ねるスピリットを出すつもりです。

第10話 明らかになる真実（前書き）

今回でやっと折り返し地点に入ったと思います。今回は原作の6話くらいになります。

第10話 明らかになる真実

杏子と再会した日の翌日、ダンは一入街を歩いていた。

（何故、魔女がバトスピのカードを持っていたんだ。）

ダンは昨日、杏子から受け取ったカードのことを考えていた。まどかやさやかから聞いた話ではこの世界には存在しない。だが、クリアの話では何らかの影響でバトルスピリッツのカードがこの世界にあるらしい。

（ダーク・ヴルム。それに魔界七将………いずれも魔女が関わってる………一体この世界で何が起きようとしてるんだ？）

ダンはそう思いながら歩いていると、ほむらがゲームセンターに入る姿を発見した。

「ほむら？あいつ………」

ダンはほむらのことが気になり、後を追った。

ゲームセンターに入り、ほむらの姿を探すとそこにはほむらとゲームをしている杏子がいた。二人は何かを話しており、ダンは二人の話を聞き入った

『はじめまして、というべきかしら？』

『ん？ああ、昨日あたし達の様子を伺ってたやつか』

『気づいていたのね。』

『それで何の用だ？』

『この街を貴方と巴ミ。そして馬神ダンに任せたいの』

『ふうん、どういう風の吹き回し？』

『美樹さやかじゃ、務まらないわ。貴方みたいな子がふさわしいわ』

『ま、そのつもりだけだね…。それで、さやかってやつどうすんのさ。』

『私が何とかするわ。だから貴方は何もしないで』

（さやかをどうする気だ？）

『そういえば、肝心なこと聞いてなかった。あんた何者だ？』

『……この街に2週間後、ワルプルギスの夜が来る』

『なぜわかる……？』

『そいつを倒せば、私はこの街を出る。でも一人では……』

『なんなら、あたしも協力しようか？ マミとダンが協力すりゃ何とかなるだろ！』

『そうしてもらつと嬉しいわ。それともしも魔女と戦った時にグリフシードと一緒にカードが落ちていたら私に届けて……』

『カード？ 何かあるのか？』

『ええ、少しね』

ほむらはそのまま去っていった。ダンはさっきの会話を聞いてあることに気がついていた。

（ほむら……アイツ……スピリットを集めてどうするつもりだ？）

その頃、さやかときゅうべえは昨日杏子と出会った場所に来ていた。

「もう他に魔女の気配はないね…」

「そう…」

するとまどかが来た。

「ねえ、さやかちゃん…。このまま魔女退治続けてたら、昨日の子と会っちゃうんじゃないの…？」

「まあ、当然そうなるだろうね」

「だったら、先に会ってお互い話し合いすれば…、そしたら昨日みたいな喧嘩に…」

「喧嘩ねえ…。夕べのあれがまどかにとって喧嘩に見えたの？あれは真正銘殺し合いだよ。お互いなめてかかってきたのは最初だけ。途中からあたしもアイツも相手を終わらせようとしてた。」

「そんなのなおさら駄目だよ…」

「だからって話し合えて？バカいわないで相手はグリーンフィード欲しさに人間をえさにしようとしてるやつなんだよ！どうやって折り合いつけろって言うの？」

「さやかちゃんは魔女をやっつけるために魔法少女になったんでしょ？あの子は魔女じゃない、同じ魔法少女なんだよ。魔女を退治し

たいと思う気持ちは同じでしょ？ほむらちゃんも！」

「そんなわけない！まどかも見てたでしょ？アイツはグリーンフシードが欲しいから、人間なんてどうでもいいって思ってるんだよ！」

「そんなの…ちがうよ…」

「あの転校生も昨日の杏子ってやつも自分の都合しか考えてない！…今ならわかるよ。マミさんやダンさんたちだけが特別なんだ。他の魔法少女だって皆あんなやつらばかりだよ！」

「そんな…」

「次に魔女が狙うのは…まどかのママやパパ、タツ君かもしれないんだよ！…あたしはただ魔女と戦うだけではなく、大切な人を守るためにこの力を望んだの。そんなひどい人間がいたら、あたしは戦うよ！たとえそれが魔法少女でも！」

そういつてさやかはどこかへ行つた。そしてまどかは泣きながらもキュウベえに説得しようと言った。

「キュウベえも何とかいつてよ…」

「僕から言わせておけば、無謀すぎることだけだよ。今のさやかじや暁美ほむらにも佐倉杏子にも勝てない。でもさやかは聞き入れてくれないよ…」

「でも、ほむらちゃんはマミさんを助けてくれた！きっとさやかちゃんもほむらちゃんの事情を知れば……」

「彼女がその事情とかを話すとは思えないよ。」

キュウベえはそう言って姿を消すのであった。

そんなこんなで翌日。さやかは今日も病院に行き、恭介のお見舞いに来ていた。しかし、部屋に行くとき誰もいなかった。

「あら、上條さんなら退院しましたよ」

通りかかった看護婦が言った。その夜、さやかは恭介の家の前に来た。インターホンと鳴らそうとした時、バイオリンの音がした。

「あ……」

きつともう大丈夫だろう……。そう思って鳴らそうとはしなかった。帰ろうと思い、さやかが向いた先にお菓子を食べている杏子がいた。

「よお、会いもしないで帰るのかよ。知ってるよ、この家、坊やの家なんだろう？ まったく、くっだらねえことで願いを使いやがって……」

「あんたねえ、」

「惚れた男をモノにするならもつといい手があるじゃん？折角手に入れた魔法でさ。もう一回再起不能にしちまえばいいのさ。なんなら、あたしが坊やをやるうか？そうすれば坊やの身や心は全部あなたのものになるんだし」

「あんただけは絶対に許さない…！」

「場所を変えようぜ。ここじゃ人目につく」

その頃、まどかは家で勉強をしているところに…

（まどか、まどか！）

窓の方を見るとキュウベえがいた。

（急いで！さやかが危ない。もうマミに伝えたから……今すぐダンと共に来てくれ！もしかすると君の力が必要かもしれない。）

まどかは急いで着替えて、部屋でデッキの調整を行っているダンに声をかけた。

「ダンさん。さやかちゃんが危ないって……キュウベエが……」

「さやかが！？まさか……」

ダンはゲームセンターでの会話を思い出していた。まさかほむらがさやかに何かをするつもりじゃないかと……

「急いで向かうぞ！」

ダンとまどかは外に出て人が少ない場所に来た。そして……

「太陽神龍ライジング・アポドラゴン召喚！まどか、背中に乗ってくれ」

「は、はい」

ダンとまどかの二人はライジング・アポドラゴンの背に乗り、さやかの所へと向かうのであった。そしてある歩道橋の上にたどり着いた。

ダンはマミと合流するために、まどかを先に行かせた。さやかも魔法少女に変身しようとするその時、まどかとキュウベエがやってき

た。

「待って！さやかちゃん！」

「まどか…！邪魔しないで！これはあたたちの戦いだから！」

「ふん、うざいやつにはうざい仲間がいるもんだね。」

「なら、あなたの仲間はどうかしら？」

杏子の後ろにほむらがいた。

「アイツは…」

「話が違っわ。美樹さやかには手をださないでと」

「あんたのやり方が手ぬるすぎんだよ」

「なら、私が何とかする」

「ふん、こいつが食い終わるまでまってやる」

「十分よ」

「さやかちゃん、ごめん」

さやかは変身しようとした瞬間まどかがさやかのソウルジェムを奪い、歩道橋の下に落とした。するとほむらは何かに反応したかのようになくなった。

「なんだ？自分から逃げたぞ……」

「まどか、あんたなんてことを……」

「だってこうしないと……さやかちゃん？」

まどかが言いかけた瞬間、さやかは倒れこんでしまった。

「お……おい？さやか？」

「さやかちゃん？」

「今のはまずかったよ。友達をほおりなげるなんてどうかしてるよ」

「なに？なんなの……？」

杏子はさやかを掴み取った。

「……どうなってんだ？コイツ死んでるぞ」

「なに！？」

「え！？」

杏子の言葉を受け、遅れてきたダンたちも驚いていた。

「お……おい！さやか、嘘だろ！？」

「さやかちゃん！」

「一体…どうなってるんだ…？」

「おい！キュウベえ！一体どうなってるんだ！さやかが死ぬなんて！」

杏子はキュウベエを睨みながら言うと、キュウベエは無表情で語った。

「はあ、それはただの抜け殻だよ」

「抜け殻…！？どういう意味だよ！？」

「さやかは今、まどかがほおりなげたじゃない」

「ほおりなげた…ってソウルジェムのことか？」

「そう、普段は肌身離さず持っているからこういう事故はめったに無いんだけどね。壊れやすい体で魔女と戦ってくれなんてとてもお願いできないよ。君たち魔法少女にとって体は底付けのハードウェアじゃないんだ。君たちの本体の魂は魔力を公立できるコンパクトなソウルジェムなんだ。僕の役目はね、君たちの魂をぬきとってソウルジェムに変えることさ」

「てめえは…なんてことを！ふざけんじゃねえ！それじゃあ、あたしたちゾンビにされたようなもんじゃねえか！」

「むしろ便利だろ？どんなに体が引き去れようが魔法で治せばソウルジェムが碎かれない限り、君たちは無敵だよ」

「なんで最初から言わなかったんだよ！？」

「聞かれなかったからさ」

「そんな重要なことは先に言っとくべきだろ！」

「はあ、君たちはそう、どうして命のありかたにこだわるのさ、わけがわからないよ」

「ぐぐ…！てめえ！」

ダンはキュウベエの話を聞いて、まどか達と違ってあまり驚いていなかったマミに話しかけた。

「マミ、お前は知ってたのか？」

「ええ、この間、曉美さんに助けてもらった時にね。教えてもらったわ。さすがに聞いたときはショックだったけど……私の場合は仕方なかったかもしれない……」

マミは悲しそうに笑った。ダンはそっとソウルジェムが消えた先を見つめた。

その時、ほむらが戻ってきて、さやかのソウルジェムをさやかの手元に戻した。

「あ…！」

すると、さやかは起き上がり、あたりを見回すと一体何がおきたのかわからない状態だった。

「ねえ、なんなの？」

第10話 明らかになる真実（後書き）

そろそろさやかが魔女化しますが……どうやって救出されるか考えていますが……ちょっと無理やり過ぎる感じがしますが、とりあえずさよかの魔女との戦いで十二宮Xレアを何体か登場させます。クリアも活躍します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818w/>

魔法少女まどか マギカブレイヴ

2012年1月8日22時50分発行